岩手県立大学看護学部紀要 13：33－44，2011
Journal of the Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

■研究報告■

地域住民のニーズに合わせたがん予防教育の検討

田口美喜子，安藤広子，上林美保子，高橋司寿子，
竹崎登喜江，似鳥徹，三浦まゆみ

Consideration of Cancer Preventive Education that Suits Local Residents' Needs

Mikiko Taguchi, Hiroko Ando, Mihoko Uebayashi, Shizuko Takahashi,
Tokie Takezaki, Tohru Nitatori, Mayumi Miura

要　旨

がんの予防を啓発する取り組みとして，がん予防に関する健康講話を開催した．本研究では，健康講話を受講した地域住民が，がんを予防するために今後の生活に役立てられる内容やより詳しく知りたい内容を明らかにし，住民のニーズに合わせたがん予防教育の検討を目的とした．

分析対象者は，健康講話終了後の質問紙調査により回答を得られた子育て中の母親34名，一般住民30名，高齢者23名である．どの対象者群からも今後役立てられる内容として『がんの発生機序・要因』『体の理解』『食事』『検診の受診』が挙げられた．より詳しく知りたい内容は，子育て中の母親は『女性のがん』『女性の体の変化』『がんの予防』『がんの遺伝』，一般住民は『電磁波』『食事』『がんになった場合のこと』，高齢者は『前立腺のこと』『最新の治療法』であった．

体の構造やがんの発生機序を理解することでがんを身近に捉え，予防への関心につながること，また性別や年代，家族内の役割などにより，詳しく知りたい内容が異なることが明らかとなった．よって住民の背景やニーズを把握した上で，がんは身近なもので予防が可能であることを積極的に啓発していく必要があると考える．

キーワード：がん予防，地域住民，健康教育

Ⅰ．はじめに

近年，わが国では生活習慣病が増加しており，昭和26年に脳血管疾患が結核にかわって死亡原因の第１位を占め，昭和33年には脳血管疾患，がん，心臓病といった慢性疾患が死因において上位を占めるようになった．平成21年にはがん，心臓病，脳血管疾患を合わせると死因の約６割を占めている[1]．

その中でも，がんはわが国において昭和56年から死亡原因の第１位となり現在に至っており，国民の生命および健康にとって重大な問題となっている．昭和59年度から「対がん10か年総合戦略」を，平成６年度から「がん克服新10か年戦略」を策定し，がん対策に取り組んできた．平成19年４月からは「がん対策基本法」が施行され．より一層がん対策を推進していくための環境が整備されている．この間に胃がん，子宮頸がんなどの死亡率は大きく減少しているものの，乳がん，前立腺がんの死亡率・罹患率は依然として増加傾向が続いている．さらに，高齢者人口の増加により，多くの部位のがん死亡数・罹患数は増加傾向にある[2]．

Ａ県では，がんの粗死亡率は年々増加しており，平成17年は人口10万対296.4となっており全国平均を上回っている．また，75歳未満の年齢調整死亡率を見ると，平成７年以降漸減傾向を示している．このことから，粗死亡率は上昇する一方で，年齢調整死亡率が低下していることは，がんによる死亡の増加は高齢化の影響が大きいことを示している[3]．これを踏まえてＡ

受付日：平成22年９月28日　受理日：平成22年12月９日

県では健康プランを策定し，がん予防として喫煙対策や食生活の改善，運動習慣の定着等の普及活動に努めている．

現在，国やＡ県ではがん治療だけではなく予防にも重点をおき，様々な取り組みがなされている．がん予防とがんの早期発見のため，住民を対象としたがん検診やがんに関する知識の普及として講演会等が各地で開催されているが，がん検診の受診率は20-30%と低いのが現状である。その原因として，がんが見つかるのではないかという心理的負担や設定された検診日時に受診できないこと，検診受診料の負担などが挙げられると考えるが，現在，死因の第１位となっているがんを健康である住民が自身のこととして身近に捉えにくいことも原因のひとつではないかと考える．保健医療従事者は，がんに関する知識として症状や治療法など専門的知識を伝授しがちであると思われる．そこで，地域で生活する住民の方々にがんを身近に捉えてもらうため，まず人の体はどうなっているのか，がんはどのようにして発生するのかを知ってもらうことが必要と考え，がん予防に関する健康講話を開催することとした．健康講話を通じて体やがんの発生について関心をもってもらうことは，がん検診の受診や日常生活におけるがん予防行動につながる効果が期待されるのではないかと思われる．また，健康講話を開催するにあたり参加者を公募した場合，内容に関心をもつ人のみが集まる傾向がある．そのため，普段はがん予防についてなかなか意識しないであろう方々にも関心をもってほしいという願いから，日頃地域住民と深く関わっている保健師と連携を取り，住民が集まる場に出向く健康講話も開催し，がん予防の普及啓発に努めた．

Ⅱ　研究目的

がん予防に関する健康講話を開催し，健康講話を受講した住民が今後の生活で役立てられることや，がんを予防する上でより詳しく知りたいことを明らかにすることで，住民のニーズに合わせたがん予防教育について検討する．

Ⅲ　研究方法

１．調査対象

Ａ県Ｂ市に在住する子育て中の母親34名と高齢者35名，Ｃ市の一般住民30名の計99名．

２．調査時期

2008年11月～2009年２月

３．調査方法

がん予防に関する健康講話（以下，講話）を対象別に計５回実施した．講話終了後，自記式質問紙による調査を行い，調査で得た回答をデータとした．

講話は，子育て中の母親を対象に３会場，高齢者を対象に１会場で，それぞれ対象者が集まる場に出向いて実施した．一般住民へは１会場で実施し，公募して参集した方々を対象とした．各会場の参集者は子育て中の母親延べ34名，一般住民30名，高齢者35名であった．

講話内容はどの会場でも共通で「どうして“がん”になるの？」と題して人体の構造とがんの発生機序の解説を主に取り入れた内容とした．また，受講者を公募した一般住民への講話では「子宮がん予防のための日常生活について」も加えてテーマとした（表１）．

子育て中の母親を対象とした３会場は子育て支援センターでの親子の交流の場であった．机と椅子が並ぶ講義形式の会場ではなく，和室やフローリングの部屋で子どもと一緒に参加でき，さらに会場への出入りは自由としてリラックスして講話を聞けるような環境づくりに配慮した．この時期の母親が講話を聞く場合，子どもの健康や子育て方法に関する内容が主になることが多いことから，どうしても子どもに目が向けられ，母親自身の健康について考える機会が少ないことが推測される．そのため今回の講話では，がんの発生機序に関する内容や子宮頸がんの概要，がん検診の重要性について述べることで，母親自身の健康について考える機会となることをねらいとした．さらに，胎児の発生・成長・成熟・加齢過程において細胞死が関与して構造や機能が形成・維持されていることや，私たちを形成した受精卵は他の組み合わせでは同じ個体とはなり得ないことなども加えて述べた．

一般住民の方を対象とした講話はＣ市内にある県立病院の会議室を会場として実施した．10代後半から70代以上という幅広い年代の方が参集し，中にはＣ市保健師や健康推進員の方も見られた．半数以上が50代から60代の女性であったことから，携帯電話やＩＨ調理器など電磁波を発生する身近な機器への注

表1．対象者ごとの健康講話の内容

項　目 ＼ 対象者	子育て中の母親	一般住民	高齢者
①ＤＮＡの意義と意味	○	○	○
②体の細胞数について	○	○	○
③‘がん’とは何か	◎	◎	◎
④ＤＮＡの損傷について（電磁波の影響）	○	◎	○
⑤細胞死の現象	○	○	○
⑥細胞死と‘がん’との関連性	○	○	○
⑦細胞死を理解するために（受精卵の形成，胎児発生過程，成長・成熟段階における細胞死について）	◎	○	○
⑧個体の‘生’と‘死’	○	○	○
⑨子宮頸がんの概要と検診について	◎	○	－
⑩子宮がん予防のための日常生活について	○	◎	－
⑪がんを招かない食生活の重要性	◎	◎	－
⑫前立腺がんの概要と検診について	－	－	◎

○：講話内容に盛り込んだ項目　◎：講話内容の中で特に強調した項目　－：講話内容に盛り込まなかった項目

意喚起や食の重要性を強調する内容を加えた．さらに子宮がん予防のための日常生活についても説明した．

高齢者を対象とした講話は，老人クラブの活動の場で実施した．対象者にとっては馴染みのある地区集会所で開催され，参集者は60代以上の男性が大多数であった．がんの発生機序についてはわかりやすく重要な点を解説し，男性が多数ということで前立腺の位置や機能，前立腺がんの症状や進行，さらに検診方法も説明に加えた．

4．調査内容

1）講話の所要時間

『長すぎる』『少し長い』『ちょうどいい』『少し短い』『短すぎる』の５件法とした．

2）参集者の規模

『もっと大勢のほうがいい』『ちょうどいい』『個別に聞きたい』『わからない』の４件法とした．

3）講話内容の理解度

『よくわかった』『わかった』『まあまあわかった』『あまりわからなかった』『わからなかった』の５件法とした．

4）講話内容で役に立つと思ったこと

対象者の自由記述とした．

5）講話内容でもっと知りたいと思ったこと

対象者の自由記述とした．

6）講話内容で難しいと思った言葉

対象者の自由記述とした．

7）今後、がん関連で聞いてみたいテーマ

『精密検査の具体的な内容について』『治療の内容，方法について』『がんの最前線（治療薬など）』『入院中の生活について』『がん患者の方の気持ち（体験談）』『がん患者の方の家族の気持ち』『がんと日常生活の関係について』『その他』の８つの選択肢から複数回答可能として回答を得た．

5．データ分析方法

調査結果を対象別「子育て中の母親」「一般住民」「高齢者」に分けて単純集計を行った．自由記述による回答は，類似した意味内容をもつものをカテゴリー化し，信頼性を高めるために研究者間で検討を重ねた．

6．倫理的配慮

Ｂ市およびＣ市の保健師に講話の趣旨を説明し，了解を得た上で講話の開催日時と会場を設定した．講話受講者に対しては，講話前に研究の趣旨について口頭で説明した．さらに調査協力は任意であること，得られた調査内容は本研究でのみ使用すること，無記名式であるため個人が特定されないことも説明した上で自記式質問紙調査票を配布し，調査票の回収をもって研究への同意とみなすものとした．

Ⅳ　結果

健康講話終了後の質問紙調査は，子育て中の母親34名，一般住民30名，高齢者23名から回収し（回収率87.9%），すべての回答を有効回答とした．

なお，文中の表記については，選択肢は『　』，自由記述による回答のカテゴリー分類は

【　】，講話受講者の自由記述は「　」で示す．

1．講話の所要時間

子育て中の母親と高齢者を対象とした講話時間は１時間であった．『ちょうどいい』と回答した者は子育て中の母親25名（73.5%），高齢者19名（79.2%）であり，どちらの対象者も７割以上は『ちょうどいい』と感じていた．また，一般住民を対象とした講話時間は２時間であり，『ちょうどいい』と回答した者は25名（83.3%）で８割を超えていた．この他に『少し短い』『少し長い』が各２名（6.7%）であった．

2．参集者の規模

子育て中の母親を対象とした講話は３会場で開催し，６～20名と各会場で参加した人数が異なった．『ちょうどいい』と回答した者は，子育て中の母親27名（79.4%），一般住民21名（70.0%），高齢者14名（60.9%）であった．「もっと大勢がいい」との回答もあった．

3．講話内容の理解度

『よくわかった』と回答した者は，子育て中の母親９名（26.5%），一般住民８名（26.8%），高齢者２名（8.3%）であった．一般住民では10代から70代と幅広い年代の方からの回答が得られ，10代の受講者３名すべては『よくわかった』と回答していた．また，『わかった』と回答した者は子育て中の母親14名（41.2%），一般住民９名（30.0%），高齢者７名（29.2%）であり，『まあまあわかった』と回答する者は他の対象と比較して高齢者に多く13名（54.2%）であった．

4．講話内容で役に立つと思ったこと

子育て中の母親では「もっと子どもを大切にしたいと思った」「命の誕生は奇跡であり，この奇跡の宝物を大切に育てたい」「（子どもの誕生は）最終的に自分が生き続けることである」など【生命の誕生】が８件と最も多く挙げられた．また，「体に良いと思ってサプリメントを使っていたが，食事をきちんと取ることが大事だと再確認できた」「やはりきちんと食事を作ることが大切だと思った」「がん予防のためには食生活が大切である」など【食事】に関することが７件，「がんについての詳しい話は聞く機会がほとんどなく，知らないことばかりだった」「がんという病気がどのようにして起こるのかよくわかった」など【がんの発生機序・要因】が６件，「細胞死によって人は生きていけるということを初めて知った．死は怖いものだけれど，子どもが自分のDNAを半分持って生き続けてくれることは，死を少し怖くなくしてくれた」「細胞死の深い内容を知って本当に人間の体，創造の神秘性にとても感動した」「今ある体は細胞によって作られ，その中にも細胞死していくものもあり守られていることに驚いた」など【細胞死】が５件あげられた．この他に「携帯電話の危険度も知ることができよかった」「携帯電話の電波が強く悪いこと」など【携帯電話の危険性】，「がんだけじゃなくて体のことがよくわかったのでよかった」「細胞についてよくわかった」など【体の理解】が各４件，「電磁波の恐ろしさと子どもとのつながり」「がんに影響する電磁波などについて」など【電磁波の体への影響】が３件，「がん検診は受けなくてはいけないなあと思いました」など【検診の受診】に関することが２件であった．

一般住民では「電磁波の恐ろしさ」「電磁波の話にはびっくりした」「携帯電話，オール電化等の電磁波の影響について」など【電磁波の体への影響】が９件と最も多かった．次いで「自分の身の回りや環境因子でがんが発生すること」「がん化することに関して初めて聞いた」など【がんの発生機序・要因】が５件，「毎日の食生活が大事、いかにバランスが大事なのか良くわかった」「食事にもっと気をつけないといけないと思った」など【食事】に関することが３件，「がんを防ぐための12か条を実践することが大切だと思った．簡単なようで難しいというのが感想」など【日常生活とがんの関係】が２件，「ＤＮＡとの関連など，わかりやすく理解できた」など【体の理解】に関することが２件であった．

高齢者では「検診をやらなければと思った」「検診（健診）は元気を確認することと聞き，いかにも感心して聞いた」など【検診の受診】に関することが６件と多かった．この他に「がんのできるしくみ」など【がんの発生機序・要因】が２件，「前立腺の位置がよくわかった」など【体の理解】に関することが２件挙げられた（表２）．

表2．講話内容で役に立つと思ったこと

子育て中の母親

カテゴリー	件数	自由記述例
【生命の誕生】	8	・もっと子どもを大切にしたいと思った. ・命の誕生は奇跡であり，この奇跡の宝物を大切に育てたい. ・（子どもの誕生は）最終的に自分が生き続けることである.
【食事】	7	・体に良いと思ってサプリメントを使っていたが，食事をきちんと取ることが大事だと再確認できた. ・やはりきちんと食事を作ることが大切だと思った. ・がん予防のためには食生活が大切である.
【がんの発生機序・要因】	6	・がんについての詳しい話は聞く機会がほとんどなく，知らないことばかりだった. ・がんという病気がどのようにして起こるのかよくわかった.
【細胞死】	5	・細胞死によって人は生きていけるということを初めて知った．死は怖いものだけれど，子どもが自分のDNAを半分持って生き続けてくれることは，死を少し怖くなくしてくれた. ・細胞死の深い内容を知って本当に人間の体，創造の神秘性にとても感動した. ・今ある体は細胞によって作られ，その中にも細胞死していくものもあり守られていることに驚いた.
【携帯電話の危険性】	4	・携帯電話の危険度を知ることができよかった. ・携帯電話の電波が強く悪いこと.
【体の理解】	4	・がんだけじゃなくて体の事がよくわかったのでよかった. ・細胞についてよくわかりました.
【電磁波の体への影響】	3	・電磁波の恐ろしさと子どもとのつながり. ・がんに影響する電磁波などについて.
【検診の受診】	2	・がん検診は受けなくてはいけないなぁと思いました. ・検診は何も無いことの確認なんだと思うと受診しようという気になりました.

一般住民

カテゴリー	件数	自由記述例
【電磁波の体への影響】	9	・電磁波の恐ろしさ. ・電磁波の話にはびっくりした. ・携帯電話，オール電化等の電磁波の影響について.
【がん発生機序・要因】	5	・自分の身の回りや環境因子でがんが発生すること. ・がん化することに関して初めて聞いた.
【食事】	3	・毎日の食生活が大事，いかにバランスが大事なのか良くわかった. ・食事にもっと気をつけないといけないと思った.
【日常生活とがんの関係】	2	・がんを防ぐための12か条を実践することが大切だと思った.簡単なようで難しいというのが感想.
【体の理解】	2	・DNAとの関連など，わかりやすく理解できた.

高齢者

カテゴリー	件数	自由記述例
【検診の受診】	6	・検診をやらなければと思った. ・検診（健診）は元気を確認することと聞き，いかにもと感心して聞いた.
【がんの発生機序・要因】	2	・がんのできるしくみ.
【体の理解】	2	・前立腺の位置がよくわかった.

5．講話内容でもっと知りたいと思ったこと

子育て中の母親では「今後機会があれば子宮がんのもっと詳しい話を聞きたい」「乳がんも少し聞きたかった」など【女性のがん】が８件と最も多かった．次いで「女性の体の変化（更年期など）」「不妊についても聞きたい」など【女性の体の変化】に関すること，「がんは遺伝するのか？」「がんで親族を亡くした場合、遺伝すると聞いたのでその辺の関係を知りたい」など【がんの遺伝】【がんの予防】に関することが各３件，【がんの原因】が２件，【がんの治療】が１件であった．

一般住民では「電磁波についてもっと聞きたい」「ペースメーカー使用者に対しての注意について」など【電磁波】が多く５件であった．次いで「がんになった余生の過ごし方」「最先端の治療方法や，患者への対応の仕方」など【がんになった場合のこと】が４件であった．この他に【食事】【ＤＮＡ】に関することが各２件，【がんの予防】【サプリメント】に関することが各１件であった．

高齢者では【前立腺のこと】【最新の治療法】が各１件挙げられた（表３）．

6．講話内容で難しいと思った内容

全体で７件の記述があり，「全体的に専門

表３．講話内容でもっと知りたいと思ったこと

子育て中の母親

カテゴリー	件数	自由記述例
【女性のがん】	8	・今後機会があれば子宮がんのもっと詳しい話を聞きたい． ・乳がんも少し聞きたかった．
【女性の体の変化】	3	・女性の体の変化（更年期など）． ・不妊についても聞きたい．
【がんの遺伝】	3	・がんは遺伝するのか？ ・がんで親族を亡くした場合，遺伝すると聞いたのでその辺の関係を知りたい．
【がんの予防】	3	・がんの予防について
【がんの原因】	2	・たばこ，お酒の量など，何を気をつければがんになりにくいかなど． ・食事やたばこの害について．
【がんの治療】	1	・がんが発見された段階の，初期や中期・後期での治療など．

一般住民

カテゴリー	件数	自由記述例
【電磁波】	5	・電磁波についてもっと聞きたい． ・ペースメーカー使用者に対しての注意について．
【がんになった場合のこと】	4	・がんになった余生の過ごし方． ・最先端の治療方法や，患者への対応のしかた．
【食事】	2	・食事の作り方（献立など）． ・食品について，もっと詳しく知りたいです．
【ＤＮＡ】	2	・ＤＮＡについて
【がんの予防】	1	・がんにならないことについてのお話，いろんな方々の健康講話をしてほしい． ・いろんな視点からの考え方など生き方，生活に関しての話を聞きたい．
【サプリメント】	1	・売薬，特にサプリメント等について．

高齢者

カテゴリー	件数	自由記述例
【前立腺のこと】	1	・前立腺のことについて．
【最新の治療法】	1	・最新の治療法．

的な言葉，内容が多く難しかった」「専門用語は聞き慣れないので分かりにくいが，講話自体はわかりやすくためになった」など【専門用語が難しい】といった内容であった．

7．今後，がん関連で聞いてみたいテーマ

子育て中の母親では『がんと日常生活の関係について』を選択する者が21名（61.8%）と多くなっており，次いで『治療内容、方法について』が14名（41.2%），『精密検査の具体的な内容について』が10名（29.4%）であった．一般住民では『がんの最前線（治療薬など）』が13名（43.3%），『治療の内容，方法について』が12名（40.0%），『がんと日常生活の関係について』が８名（26.7%）であった．高齢者は『治療の内容，方法について』が７名（30.4%）と多く，次いで『がん患者の方の気持ち（体験談）』が３名（13.0%）と多くなっていた（図１）．

Ⅴ　考察

対象者の違いを考慮した講話を実施したことから，子育て中の母親，一般住民，高齢者の対象者群ごとのがん予防の捉え方とそれぞれのニーズに合わせたがん予防教育について自由記述の回答に沿って考察していく．

1．講話で役に立つと思った内容

どの対象者群からも共通して挙げられた内容は【がんの発生機序・要因】【体の理解】に関することであった．【がんの発生機序・要因】については「がんについての詳しい話は聞く機会がほとんどなく，知らないことばかりだった」「がんの要因として生活習慣は聞いていたが，環境因子でがんが発生することがわかった」といった記述から，講話は日常生活の中でほとんど聞くことのない内容であったことがうかがえる。また，「がんだけではなく体のことがわかってよかった」「前立腺の位置がよくわかった」など【体の理解】に関する記述も得られた．細胞やＤＮＡに関することなど人体の構造や機能の詳細を講話の内容に盛り込んだことで，自身のこととして【体の理解】が深まり，その上でがんの説明をしたことは【がんの発生機序・要因】を理解しやすくさせたものであることがわかる．これは，今後がんを予防するための行動，つまり保健行動につながる可能性が示されたのではないかと考える．

保健行動について畑[4]は「本人が健康のためになると考え，それゆえにとる行動」，宗像[5]は「健康のあらゆる段階にみられる，健康保持，回復，増進を目的として，人々が行うあらゆる行動」と定義しており，健康を

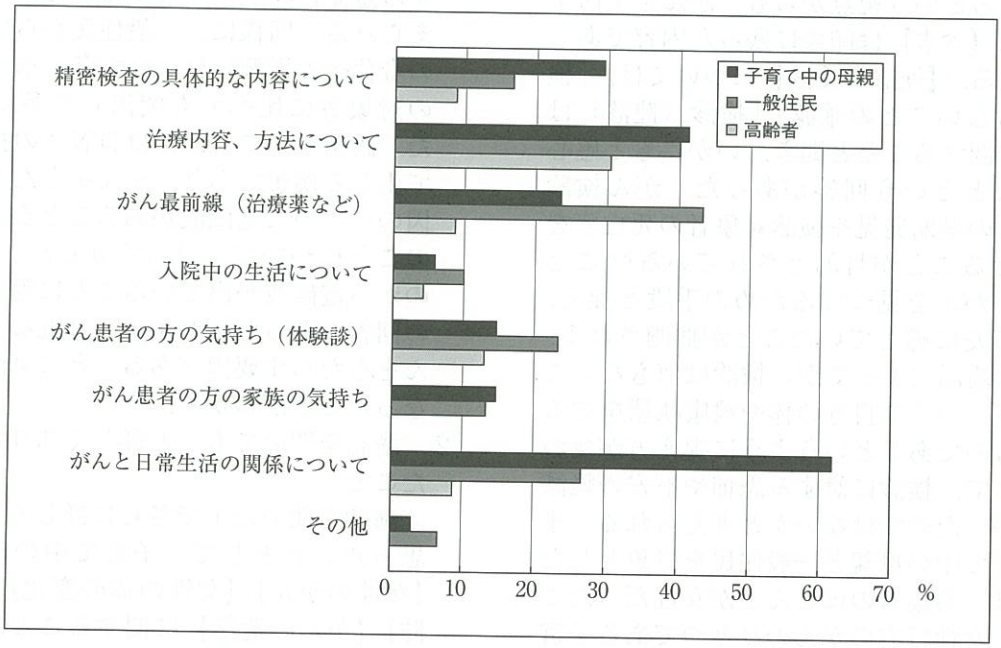

図１　今後，がん関連で聞いてみたいテーマ

（子育て中の母親ｎ=34，一般住民ｎ=30，高齢者ｎ=23）

目指すための行動であることがわかる．保健行動理論であるヘルス・ビリーフ・モデルは，保健行動に関して各個人によって合理的に行われる主観的判断の部分を取り上げたものであり，根幹をなす概念は①疾病にかかる可能性の自覚，②疾病の重大さの自覚，③利益の自覚，④障害の自覚の４つ[6]とされている．【体の理解】と【がんの発生機序・要因】は特に概念①，②を促進させるものであったと考える．また，人はある保健行動を行うことのメリット（「有益性」）と，その行動を行うことを妨げる要因（「障害」）をはかりにかけ，「有益性」が「障害」よりも大きいと思えたときに，その行動を行う可能性が高まる[7]と言われている．がんを予防するための具体的な行動としてどの対象者群からも【食事】【検診の受診】が挙げられており，概念③，④が促され，「有益性」が大きいと思えたからこそ挙げられたものであると考える．【食事】については，体の機能や細胞について【体の理解】があった上で食事をきちんと取ることに重要性を実感しており，今後の食生活を考えると同時にこれまでの日々の食生活を振り返るきっかけにもなっていた．特に，子育て中の母親や半数以上が50代から60代の女性であった一般住民にとっては，自身の健康管理だけではなく子どもや家族の健康を支えるという視点からも，がんを予防するために【食事】は印象に残った内容であったと考える．【検診の受診】については，「検診は何もないことの確認」「検診（健診）は元気を確認することと聞き，いかにもと感心した」などという回答があった．がん検診は，がんの早期発見や検診対象者の死亡率を低下させることが目的とされている[8]ことからも，がんを見つけるための手段と捉え，恐怖や不安に感じていたことが推測される．しかし，講話によってがん検診は何もないことの確認，つまり自分の体や健康状態を知るためのものであるというように捉え方が変わったことで，検診に対する恐怖や不安の軽減につながったのではないかと考えられる．また，子育て中の母親と一般住民を対象とした会場では，参集者のほとんどが女性だったことから，女性特有のがんのひとつである子宮がんについて原因や症状，検診や治療などを詳しく説明したことで【がんの発生機序・要因】の理解にもつながり，検診を受けることの重要性を実感できるものとなったと考える．特に子育て中の母親は育児や家事に追われ，がん検診を受診する機会を逃しやすい．しかし，子どもや家族を支えるためにも母親自身が健康であることが必要である．母親が自身の体や健康について考え，日常生活を振り返るとともに今後のがん予防のための具体的な行動を考える機会となったことは意義あることである．これは高齢者も同様であり，具体的な体の臓器として前立腺の位置や機能，さらに前立腺がんの症状や進行を知ることで自身の体を理解でき，【がんや体についての知識】が深まったと考える．講話後は「前立腺がん検診を受けたい」というがん検診の受診に意欲的な回答もあり，健康は自分で守っていくものという意識づけにもつながったのではないかと考える．

この他に，子育て中の母親から多く挙げられたのは【生命の誕生】に関する内容であった．私たちを形成する受精卵は他の組み合わせでは同じ個体となり得ないことであり，生命の誕生はまさに奇跡的なことであること，つまり現在育てている子どもが唯一の存在であることを母親自身が理解することで，改めて子どもを大切に育てたいという気持ちが芽生えている．この気持ちこそが，子育てに対する意欲の向上につながるのではないかと考えられる．同様に，一般住民からは【電磁波の身体への影響】について多く挙げられ，他の対象者に比べても突出して多くなっていた．講話の中で，がんはＤＮＡの損傷によって生じる疾患であり，がんをもたらす生活要因のひとつに電磁波があることを述べた．このことについて「びっくりした」「身近なものから電磁波が出ていることに驚いた」などの回答があったことから，身近なところにがんをもたらす要因があることに気づく機会となったことがわかる．

２．講話を聞いてもっと詳しく知りたいと思ったこと

講話を聞いた上でさらに詳しく知りたいと思ったこととして，子育て中の母親からは【女性のがん】【女性の体の変化】【がんの予防】【がんの遺伝】に関することが多く挙げられた．一般住民からは【電磁波】が最も多く，他には【食事】【がんになった場合のこ

と】が挙げられた．高齢者からは少ない回答ではあったものの【前立腺のこと】【最新の治療法】が挙げられた．

特徴的なこととして，まず，子育て中の母親では【女性のがん】【女性の体の変化】が，高齢者では【前立腺のこと】が挙げられた．これは，がんの発生機序に関する内容に加えて，子育て中の母親には子宮がん検診，男性の参集者が多かった高齢者には前立腺がん検診に関する内容を加えたことによるものであると考える．受講した子育て中の母親はほとんどが20代から40代までの女性であり，この年代は特にも子宮頸がんの罹患が急増していることから，子宮頸がんの概要と検診を受けることの重要性も加えて説明した．また，高齢者は男性の受講者が多かったことから前立腺がんに焦点をあてた内容とした．前立腺がん検診は開始されて間もないことから，必要性や検診方法についてしっかりと周知されていない可能性があると思われる．そのため，前立腺の場所や機能についてふれた上でがんの発生機序や検診について説明したことは，前立腺がん検診の必要性や検診方法の周知にもつながったと考える．さらに子育て中の母親からは【がんの遺伝】についても詳しく知りたい内容として挙げられた．これらは母親が子どもや家族とのつながりを意識していると思われ，母親自身だけではなく子どもや家族の健康を守りたいという思いから挙げられたと考える．

一般住民から挙げられた【電磁波】については，身近にある携帯電話やペースメーカーが電磁波と関連があることを知り，その上で携帯電話の使用やペースメーカー使用者への対応に関することを知りたいと感じていた．このことから，日常生活の中でほとんど聞くことのない内容を新鮮に捉え，今後どのように行動したらよいのか考えるようになっていると思われる．【食事】は，日々の生活において欠かせないものであることから「食品についてもっとよく知りたい」「食事の作り方(献立など)」といったように，がんを予防するための具体的な行動としてさらに知りたいという思いに至ったことが読み取れる．

また，一般住民からは【がんになった場合のこと】，高齢者からは【最新の治療法】が挙げられた．これは，がんを予防したいという反面，講話を通じてがんを患った場合のことも考えるきっかけとなったことがうかがえる．がんによる死亡率や入院・外来受療率[9]は，40代から急激に増加し，年齢を重ねるごとに増加傾向にある．そのため，50～60代が約6割であった一般住民とすべて60～70代であった高齢者の参集者からは「今年になって周囲で60代の方が3人も亡くなり他人事ではない」「最先端の治療方法や患者への対応の仕方（を知りたい）」といった回答があり，がんを患いやすい年代であることの自覚に至ったと思われる．

この他に「詳しい内容の講話だった」「楽しくわかりやすかった」といった回答も得られたことから，対象者の特徴を踏まえた講話としたことで受講者が講話内容を身近に感じて自身のこととして受け入れやすく，今後の健康について考えるきっかけとなったのではないかと考える．

3．今後，「がん」関連で聞いてみたいテーマについて

子育て中の母親は『がんと日常生活の関係』の選択が多かった．20代から40代の比較的若い女性の回答であり，がんの治療内容や入院中の生活など，がんになった後のことよりもがんになる前の日常生活，つまりがんにならないための日常生活について一番関心をもったことがうかがえる．これは，がんの発生機序や要因を理解した上でがんの予防が可能であることがわかったからこそ得られたものであると考える．また母親自身だけではなく，子どもや家族の健康を守りたいという思いからも，がんの予防に関心をもち，今後聞いてみたいテーマとして挙げられたと考える．

一般住民では『がんの最前線（治療薬など)』『治療の内容，方法について』が多く挙げられた．今回の講話内容でも普段なかなか聞くことのない電磁波などに関心をもっていた方が多く，今後聞いてみたいテーマも同様に，日常生活の中で詳しく聞くことのない内容として『がんの最前線（治療薬など)』『治療の内容、方法について』が挙げられたと考える．また，がんを患った場合のことも見据えた上で，がんの治療内容や最新情報について詳しく知りたいという積極的な姿勢もうかがえる．

高齢者は『治療内容』が最も多く挙げられ，次いで『がん患者体験談』となっていた．今回の講話内容はがんの予防に焦点をあてたものであったが，今後聞いてみたいテーマとして選択されたものは，一般住民と同様に実際にがんを患った場合を想定した内容になっている．このことから高齢者はがんを身近なものと捉えていることがわかり，さらに，がんを患った後のことをイメージしやすくするためにもがん患者の体験談が選択されたのではないかと考える．

なお，この調査項目は，今回の講話を受講してさらに聞いてみたいテーマとして挙げられるであろうと予測した８項目について回答を得たものである．この８項目にとどまらず，前述の調査項目「２．講話を聞いてもっと詳しく知りたいと思ったこと」の自由記述で多くの回答を得られたことから，講話内容について大きな関心をもってもらえたものと捉えている．

４．対象者のニーズに合わせたがん予防教育について

子育て中の母親には子宮がんや生命の誕生に関することを，一般住民には電磁波や食事に関することを，高齢者には前立腺がんのことについて，対象者の性別や年齢，家族内での役割といった社会的背景を考慮した内容を加えながらがん予防に関する講話を実施した．その結果，これらの加えた内容がそれぞれの対象者群において強く印象に残ったことがうかがえ，がんを予防するためにより詳しく知りたいこと，つまりニーズに違いがあることがわかった．今回，講話終了後の質問紙調査に回答してもらうことで明らかとなったため，この回答をもとに今後，対象者の特徴や背景を踏まえたがん予防教育にいかせるものと考える．

また，今回の講話でどの対象者群からも今後の生活に役立てられる内容として挙げられたのは，【がんの発生機序・要因】【体の理解】であった．人の体がどのようになっているのか，また，がんはどのように発生するのか理解があったからこそ，がんは予防できるという捉え方につながり，さらに日常生活の具体的ながん予防のための行動として食事やがん検診の受診などを考えるまでに至ったものと思われる．

「変化のステージモデル」[10] によると，人の行動変容は①無関心期，②関心期，③準備期，④行動期，⑤維持期の５つのステージを通るプロセスであるとされている．今回の対象者は講話を受講しようとする段階で健康に対しての関心はあることから，②関心期の段階であったと考える．そして講話終了後はがん検診を受診する必要性や，日常生活では具体的に食事を気をつけたいといった内容が挙げられたことから，次のステージである③準備期の段階に移行したものと考える．保健行動を促すためには，対象者の健康に対する考え方や生活習慣改善の意欲など，健康への関心度に合わせて働きかけをすることが求められることから[11]，単にがん検診の受診や日常生活における注意点だけでなく，がんの発生機序や体の理解は健康に対する考え方や生活習慣改善の意欲につながったと考える．

Ⅵ　結語

本研究では地域住民に対してがん予防に関する健康講話を行い，講話終了後の質問紙調査によって，住民が今後の生活で役立てられる内容やより詳しく知りたいことについて明らかとなった．

まず，今回の講話は対象者を公募して実施するものだけではなく，住民が集まる場にも出向いて実施したことで，がん予防について関心をもつ人以外の方々にもより幅広く啓発する機会となった．そして，講話を通してがん予防について多くの方々に関心をもっていただけたことには大きな意義があると考える．また，講話を受講することにより自身の体やがんの発生機序，がんは予防できることの理解にもつながった．さらに，がん予防の具体的な行動として，がん検診の受診や日常生活では特に食事に気をつけるといった内容が挙げられた．がん検診については早期発見だけでなく何もないことの確認という捉え方に変化したことから，今後のがん検診の受診につながる良いきっかけになったと考える．これらのことから，がん予防教育を行う上で対象者の年代や性別，家族内での役割など背景を把握した上でがんを身近に捉えられるような内容を考慮することは，対象者のがん予防に対する関心や理解度の向上につながることが示唆された．

今回は限られた地域住民の方々を対象とした

講話の開催となったことが研究の限界であった．今後は他の地域での講話の開催や幅広い年代の方々への働きかけにより，さらに細かく住民のニーズを捉え，そのニーズを踏まえてがん予防教育を検討していくこと，加えて住民のニーズに合わせた教材検討も課題であると考える．

謝辞

本研究の参加に快諾し，ご協力くださいましたA県B市，C市の住民の皆様に深く感謝いたします．また，講話を開催するにあたり会場の調整や運営にご協力いただきましたB市およびC市保健師をはじめ，多くの関係者の皆様にも厚くお礼申し上げます．

なお，本研究の一部は，第68回日本公衆衛生学会で発表した．

引用文献

1）厚生労働省：人口動態統計年報主要統計表．(http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/xls/toukei)，2010年11月11日検索．
2）財団法人厚生統計協会：国民衛生の動向 2009，56(9)，151-154，2009．
3）岩手県：岩手県がん対策推進計画，3-5，2008．
4）畑栄一，土井由利子：行動科学－健康づくりのための理論と応用，南江堂，36-37，2003．
5）宗像恒次：最新 行動科学からみた健康と病気，メヂカルフレンド社，84-85，1996．
6）前掲3)，17-18，35-36．
7）黒田裕子：看護診断のためのよくわかる中範囲理論，学研，45-46，2009．
8）がん検診の目的は？：財団法人日本対がん協会HP (www.icancer.jp/about_cancer/handbook/1mokuteki.html)，2010年6月2日検索．
9）前掲1)，396-397，448-451．
10）前掲6)，43-45．
11）津下一代：相手の心に届く保健指導のコツ，東京法規出版，62-73，2008．

Abstract

In order to help improve cancer prevention, we held a lecture on cancer prevention for local residents. This study aims to clarify the type of information that the participants would utilize and want to know in detail to prevent cancer in their future lives, and to examine cancer preventive education that would suit the needs of local residents.

The subjects were 34 mothers raising children, 30 general residents, and 23 elderly people, all of whom completed a questionnaire after the health lecture. All subject groups indicated "mechanism and factors of cancer development," "understanding body systems," "diets," and "taking screenings" as the information that could be utilized in the future. As the information that participants wanted to have in detail, mothers raising children indicated "cancer in women," "change in female body," "cancer prevention," and "inheritance of cancer"; general residents indicated "electromagnetic waves" and "what happens when you get cancer"; and elderly people indicated "about prostate" and "state-of-the-art treatment."

This study revealed that understanding the body systems and mechanism of cancer development leads one to view cancer as a personal issue and to have an interest in prevention and that the information one wants to have in detail differs depending on gender, age, and the role in a family. Therefore, for cancer prevention education, it is necessary to understand the background and needs of residents and to actively increase the awareness that cancer is a personal issue and can be prevented.

Key Words：cancer prevention, local residents, health education